

ぼく の 思想形成 と 蔵書形成

My intellectual development and library building

日本学士院会員・名古屋大学名誉教授

Member of the Japan Academy

Emeritus Professor of Nagoya University

水 田 洋

MIZUTA, Hiroshi

Abstract

I was born in 1919 and grown up in a middle class area of Tokyo. The city was temporarily rather prosperous as a byproduct of WWI (1914-1918). The Factory Law was promulgated in 1916 in spite of the obstinate opposition of business and industry interests. In 1925 the Universal Suffrage Act was enacted as a result of the nationwide movement. But it was immediately followed by the Maintenance of Public Order Act which menaced by death penalty all the attempt to change the imperial regime and private ownership. Needless to say this was a legal reflection of the ruling classes' scare caused by the Socialist revolution in Russia. Marxist thought penetrated among students so widely that it was said clever students would become Marxists. The government strengthened the control in education so as to make students' reading circles the target of police arrest. The present writer was among them, clever or not.

Towards the end of December 1941, I was driven out from the final course of the university by the break out of the Pacific War. In December 1942 I was on board for the military occupied Jawa as a civilian research worker attached to the army. The three books I took with me were *Leviathan* of Thomas Hobbes in the Everyman's Library, *Farewell to Arms* of Ernest Hemingway in the Penguin Books, and a volume of Japanese poetry of Mokichi Saito. On my arrival at Singapore I was astonished to find nicely supplied bookshops on the very place where the battle was deadly fought less than a year ago. There I bought *Studies in Medieval Thought* of G. G. Coulton and an introduction to the Russian grammar in English. I had no mind of hoping Japan's victory.

While I have been working in Jawa for nearly three years, I learned how books were collected and used in the West, even in a colonial island. In the library of the Higher Law School of Jawa I found Franz Borkenau's *Von feudalen zum bürgerlichen Weltbild* which I had been looking for. I was lucky enough to make a TS copy of it to bring with me home from POW camp.

In December 1949 I was appointed an associate professor of Nagoya University in charge of the history of economic thought. Before I began to give a first course of lectures I had to face with a fatal problem of the poverty of the library holdings. It was not simply a result of Japan's isolation during the war but also was resulted from the very character of the former Imperial University of Nagoya which totally lacks faculties of humanities and social sciences. Since then it has been my official duty and private interest to collect the books of certain importance published from the time of Gutenberg to the ends of the Pacific War.

Keywords: Mizuta Collection (水田文庫), Taisho democracy (大正デモクラシー), university library's holdings (大学図書館の蔵書), Norman, Herbert (ハーバート・ノーマン), Pascal, Roy (ロイ・パスカール), Adam Smith's library (アダム・スミスの旧蔵書), Kinokuniya, Co., Ltd. (紀伊国屋書店), foreign books (洋書), occupation army in Jawa (ジャワ占領軍) POW in Slawesi (スラウェシ島での捕虜)

思想形成

大正デモクラシーの日本は貧しい後進国であった。後進性の典型的な例は治安維持法（大正14：1925. 3. 19）であるが、工場法の施行（大正5：1916. 9. 1）に至るまでの資本家側の長期抵抗も、かれらのメンタリティを示している。風早八十二『日本社会政策史』（日本評論社1937）は、日本資本主義論争のまとめとして有益であった。ぼくがこの論争に気がついたときに（東京商大予科三年）この本が出たわけで、まだ『日本資本主義発達史講座』（1932-33）は古本屋で入手できたが、論争をフォローすることはできなかった。論争には完全に遅刻である。コミンテルンの日本にかんする32年テーゼ：ブルジョワ革命から社会主義革命への転化を、ドイツ語から河上肇が翻訳したので“強行的に”だが、英語版では“急速に”だった。

貧しさの印象として幼時の記憶に残っているのは、麻布の古河橋のあたりに群れていた立ちんぼうである。魚籃坂を品川へ越える荷車を押すことが収入源だったのだろう。これと対照的に、中学進学率が全国平均では7%、東京市では10%というのに、ぼくがいた青南小学校では殆ど100%に近かった。東京市に隣接しながら、渋谷の町立小学校では、加藤周一ほか一名ぐらいだったかもしれない。都市化、特に都市（山の手）中産階級文化の形成（青山と小石川）。

大正デモクラシーの文化的達成は？と聞いたら、

文壇と全国鉄道網という答えが返ってきた。ぼくは受験勉強をまともにしていないので、古今を通じて日本文学の教養がない。谷崎も荷風も読んだことがなく、葉山嘉樹の『海に生くる人々』（1926）以下のプロレタリア文学が続くのだが、気がついてみるとこれはすでに大正デモクラシーの枠をこえた大正15年すなわち昭和元年であって、しかもぼくにとっては同時ではなかった。多少の同時代感覚をもって読むようになったのは、転向文学、高見順、島木健作、里村欣三、久保栄であり、その直前の島木の『再建』は、発禁の手が及ぶ前の台湾で文芸部の委員長が手に入れた。

大正デモクラシーの成果が昭和になって形を整えた例は、マルクス主義にも見ることができる。野呂栄太郎と小林多喜二。築地小劇場の開場は1924年だった。1926年に結成された近衛秀麿の新交響楽団は、もちろんこれとは直接に関係がないのだが、築地と新響を、大正デモクラシーが生んだ山の手小市民文化のシンボルとしてあげることができるだろう。いいだ・もも『斥候よ、夜はなお長きや』（1961角川書店）

大正デモクラシーそのもののシンボルは、もちろん普通選挙法（1925）である。女性の参政権が認められなかったので、遅れているといわれるが、遅れていたのは日本だけではない。男性だけのためにも、1922年に生まれた女の子に「普選ちゃん」という名前をつけたほどだった。

マルクス主義への接近は予科に入ってからで、それまでは啄木『呼子と口笛』と葉山嘉樹など。生きかたの問題及び学問の方法としての合理主義からマルクス主義へ。岩波文庫のマルクスもののなかで経済論文よりも『ユダヤ人問題』と『ドイツ・イデオロギー』。マクス・アードラーの影響もあるかもしれない。このオーストロ・マルクシストには、春秋社の世界大思想全集第42巻(1931)に井原紘の訳がある。井原はその後岩波文庫にフォアレンダーの『カントとマルクス』(1937)を訳してやや長い解題をつけた。小泉信三の弟子で慶応の教員、昭和二年の卒業、フィリピンで戦死。

思想の方へールカーチ・ジェルジュへの関心はいつごろからか?『歴史と階級意識』の初版原書の本郷の福本書店で買ったのは、文芸部の『一橋』の印刷所が本郷にあったことによるので1938年。ドイツ語も内容も予科三年では歯が立たなかった。

ディルタイからマルクスへというのは、めずらしいコースではなかった。あとで知ったことだが船山信一、グレテユゼン(ディルタイの高弟、ベルリン大学教授、ヒトラーに抗議して辞職)。追体験による理解と史的唯物論とcontextualism。

府立一中4年から商大予科に入学したのは2.26事件の後1936年4月。すでに人民戦線とスペイン内戦は危機的状況にあった文化擁護国際作家会議(1935年6月21-25日、パリ)の状況を日本に伝えたのは、雑誌『セルパン』(春山行夫編集)と『世界文化』(新村猛編集)であった。『セルパン』については記憶だけによっている(受験勉強中)、両誌の先陣争いの判定はできない。『文化の擁護』1935年版(小松清編)と1997年版(高橋治男編集代表)が、量的に319ページと703ページという違いになっているのはもちろん、当時とその後の情報収集のちがいである。これについては後の訳の編訳者あとがきがくわしい。この会議で、印象派の画家ポール・シニャック(1863-1935)がジッドとともに共産党を支えたこと(死に至るまで)に、ぼくはながいあいだ、疑問ではなく詳細を知りたいと思っていた。疑問ではなくというのは、印象派左派としては当然だったからである。とくに1932年以来、かれは共産党にたいして距離をとりながら、平和主義者として反戦運動に積極

的に参加した(1912.9.2 フェネオンへの手紙。Cf.Ferretti- Bocquillon, et al, *Signac 1863-1935*. Metropolitan Museum of Art/ Yale University Press, 2001, p.321。

35年版で読んだとき一番おもしろかったのは、『聖職者(知識人)の背任』(1927)を書いたジュリアン・バンダ(Benda, Julien, 1867-1956)と人民戦線そのものといわれたジャン・ゲノーとの論争であった。バンダはそこで、貧困や飢餓が文学の主題たり得るか、ラシーヌの例をあげて問いかけた。バンダの初版(著者署名本)はヌシャトゥルの古本屋で買って、展示図書の中にある。それに彼の著書を10冊ばかり添えておいた。当時の内外の反響は?というときに、この大学図書館にはストックがない。

アンドレ・ジッド『ソヴェート紀行』(ソヴェート批判の始まり)岩波文庫は発禁。

蔵書形成

名古屋大学には文系学部がなかったし、新設文学部の教官たちは図書館に関心がなかった。

空白地帯(歴史的地理的)の出版物と研究資料の収集。気がついてみるとこれは大変なことで、古い図書館が当然のこととして持っている同時代文献が、ここにはないのである。名古屋高商図書館に、大正昭和の経済学商学関係図書がいくらかあるだろうが、その他の領域については、名古屋大学図書館はすくなくとも和書については、市立図書館に劣るだろう。しかし、たとえば英文学では、ディケンズぐらいいは新版で揃っているだろうが、ベネット(Bennett, Arnold, 1867-1931)、キプリング(Kipling, Rudyard, 1865-1936)、ウェルズ(Wells, Herbert George, 1866-1946)、etc.は?これをどうするか、しないのか。

日本におけるバンダもジッドも、しらべようがない。ジッドと呼ばれていたころの邦訳全集は、はいっているのか。1848-1945年ヨーロッパ近・現代社会思想史とすれば、双方それぞれに意味のある年だから、何か出てくるかもしれない。ぼくの蔵書の残りの13,000冊がどのくらい役に立つか。

空白とまではいわなくても、自分の研究に直接に必要でなくても、教育機関として所蔵しておくべき本もある。この蔵書の中心も目的も研究上の必要を満たすためであって、読書の楽しみという

ようなことは、付随的に生じるかもしれないが目的の中に含まれてはいない。自分が読まなくてもいいのである。ぼくの蔵書を使えばいくつかのテーマで論文が書けるといったのは、その意味である。もともとぼくは、社会思想史というものを、言語だけでなく人間の生き方についてのさまざまな表現を、論理的な言語で捉えなおすことだと考えているので、そのことだけを考えても収集の範囲は広くならざるをえないのだ。そのような個人蔵書の構築は、社会思想史の研究者が1949年に、図書館空白の名古屋大学に着任したことによって必然的な仕事になった。研究上の必要からの自分の読書は、次々と系列を作っているのではほとんど選択の余地も時間もなく、読書の楽しみとは関係がない。スコットランドの友人は「まるでプロテスタントの職業倫理だな」とわらった。そういうことを考える余裕ができたのは、きわめて最近のこと、研究心が衰えたためかも知れない。

付録1 ノーマンとロル 本は漂流する

Mr. Norman とかかれたエリック・ロルの *History of Economic Thought* がぼくの蔵書の中にあつた。まだファースト・ネームで呼ぶようになっていない関係での寄贈と考えられる。

Roll (1907-) と Norman (1909-57) と Pascal (1904-80) と Cornford (1915-36) 思想史研究者をつないだロイ・パスカルのモダン・クォータリ論文
モダン・クォータリにおけるパスカルとロル

二人の論文の間には、何も共通するものがないように見えるかもしれないが、一読明らかになるのはスミスからマルクスへという共通の枠組みの存在である。そのとき二人の間に、交友関係はなかったのだろうか。

その年に31歳で『経済思想史』(Roll, Eric, *A history of economic thought*, London, Faber and Faber) を出版したロルは、オーストリア・ハンガリー領であった チェルノヴィツのドイツ系(ユダヤ人)銀行家の子で、バーミンガム大学で歴史家ウィリアム・アシュリに最後の弟子として学んだ後、新設ハル大学に招かれた人である。二

人の交友を妨げるものは、パスカルが就職したバーミンガムとハルの間の距離だけということになりそうだが、左翼読書クラブの会員が四万ということから推測すれば、二人が出会うような集会も珍しくはなかっただろう。学生の読書会を片っ端からつぶしていった特高警察のようなものは、ここには存在しなかった。バーミンガム大学に二人が同時にいたことさえ考えたくなるのだが、実際には1939年に、ロルがロックフェラーの奨学金でアメリカにわたったことによって、イギリスでの交友の道はたたれたのである。

他方でノーマンは、ケンブリッジからカナダに帰国したのち、ハーヴァード・エンチン財団の奨学金で研究生を送り(1936-39)、学位論文として「日本における近代国家の成立」を書き、1939年に語学官としてカナダ外務省に採用された。39年から太平洋戦争までの期間にノーマンとロルは共通の友人として都留重人を持ったが、都留を通じてであれ直接にであれ、二人が親交を結んだとは思われない。時代の急迫はそれを許さなかった。

Cornford, John (1915-36): Trinity College, Cambridge から International Brigade in Spain へ

悲劇の外交官といわれるハーバート・ノーマンは、日本生まれのカナダ人で、1933年秋から35年夏まで、留学生としてケンブリッジ・レフトの学生群の中にいた。彼は共産黨員としてヴィクター・キアナン(1913-2009)とともに植民地出身学生のオルグを担当し、学生運動の輝けるリーダーであったコーンフォードとの親交を享受することができた。コーンフォードはまもなくスペイン人民戦線の国際旅団に参加して、戦死してしまうのだが、別れに際して彼がノーマンに贈ったのはロイ・パスカルの『ドイツ宗教改革の社会的基礎』(Pascal, Roy, *The social basis of the German Reformation. Martin Luther and his times*. London, Watts & Co., 1933) であった。宣教師の子というノーマンの出自を考えてのことだったかもしれない。) この本の著者のパスカルは、当時ケンブリッジのペンブルック・カレッジのドイツ学講師で、共産黨員であった。彼が1938年に書いた論文「所有と社会 十八世紀のスコットランド歴史学派」

は、副題のとおり、スミスやファーガソンのスコットランド歴史学派を、ナチスに屈服したドイツ歴史学派に対比して称揚したものであった。この論文が日本のスミス研究者に知られるようになったのは、大戦後の1954年のことであったが、高島善哉のように戦争中に孤立感になやまされた先駆者たちをよろこばせた。

Pascal, Roy, Property and Society. The Scottish Historical School of the Eighteenth Century. *The Modern Quarterly*, Volume One 1938. (Published jointly by Victor Gollancz and Lawrence & Wishart, London.), pp.167-179.

Roll, Erich, The Decline of Liberal Economics. *The Modern Quarterly*. Volume One 1938, pp.78-90.

これが掲載されたのは、モダン・クォータリ第1巻第2号で、前号即ち創刊号には、エリック・ロールの論文「自由主義経済学の没落」が掲載されていた。1939年9月1日にドイツ軍がポーランドに侵入し、3日にはイギリス・フランス両政府がドイツに対して宣戦布告し、11月にはアメリカ政府が中立法を修正して両国に対する武器援助を決定する。このような状況の中でアメリカに到着した32歳のロール教授を、両国政府が信頼し利用しないはずはない。大体、大学教授というものに対する信頼度が、日本よりはるかに高いのである。

ロールは戦争体制のなかで官僚に転身して業績を認められ、97歳で死去したときはイプスデンのロード・ロールとして貴族であり、イスタブリッシュメントの背景を持たない *established man* とよばれた。官僚としての彼が、若き日の名著をどのように評価していたかはわからないが、どこかで彼が、思想史の方法としての知識社会学に疑問をもつようになったと書いたのを見た覚えがある（2版の序文か）。方法の問題は生き方の問題でもあった。邦訳は隅谷三喜男グループ。ただし思想史ではなく学説史として。

ノーマンの自殺は、彼が宣教師の子でありクリスチャンでありながら、共産党系団体への加盟を聞かれて、*by no means* と虚偽の答えをしたことと、関係がないであろうか。コーンフォードがおくったパスカルの本が、それを予想させていた

か？ノーマンとともにケンブリッジ共産党で活動したヴィクター・キアナンも、一昨年なくなった。

ロールが *Mr. Norman* に贈呈した自著の初版が、ぼくの蔵書の中にあつたということはまえにのべた。これは一冊の本の流通にぼくが偶然に関わった例である。次に述べるのは、ぼくが買い損なって探し続けた本が、知らないうちに名古屋大学図書館に入っていたという話である。

付録2 ニュウカム・キャップの説教パンフレット

戦後、洋書輸入が再開されて軌道に乗り始めたころ、紀伊国屋の若い人がイギリスの古本屋のカatalogをくれた。そのCatalogは記念に保存しておいたので、今度の7千冊のなかに入っているかもしれない。それはイングランド北部の古都ヨーク市の石門近くの、トマス・ゴドフリ書店の1952年のCatalogで、アダム・スミスの蔵書票のあるニュウカム・キャップのアメリカ問題に関する説教パンフレットを紹介していた。はじめて出会ったイギリスの古本屋Catalogに、為替レートも支払い方法もわからないままで注文したのだが、空振りであった。1954年から56年までの留学中に、スミスの蔵書目録と蔵書票という問題があるのに気がついたが、当初はそれから50年足らずを蔵書票を追っての旅に費やそうとは、夢にも思わなかった。

その後まもなくの留学以来、ニュウカム・キャップを探し続けたのだが、めぐり合ったのはかれの妻キャサリンの自伝ぐらいであった。ところが1、2年まえにキャップの別の説教を買うことができたので、その古本屋に、キャップについてと、ぼくとキャップの関係について説明して謝意を述べておいた。おりかえし、あなたの手紙を読みあなたの『アダム・スミス蔵書目録』を読んで、自分がしていることがわかってありがたかったという返書があった。

最近大変ありがたい書評を書いてくれた坂本達哉が「水田の本質はビブリオグラファー」というある大家の発言を伝えている。確かにその間、ビブリオグラファーとしてスミス蔵書票を追うとともに、キャップの著書をさがし続けて、オクスフォードから出版したスミス蔵書目録には、問題のキャップの説教は所在不明として登録した。その後まも

なくの、名古屋大学が引き取ったぼくの蔵書の整理などで図書館に出入りしているうちに、まったく偶然にそのパンフレットがすでに永井文庫の1冊として図書館に入っていることを知ったのである。永井は非国教徒のものを集めていたので、著者にも蔵書票にも気がつかなかったというのだが、ぼくも蔵書票に気を取られていたら、ニューカム・キャップが何者であったかには注意しなかったかもしれない。

付録3 洋書という本

ぼくの蔵書約2万冊の中から7千冊が、名古屋大学中央図書館に入った。この7千冊は1572年版のボダンから19世紀初頭にいたる（J. Millをふくみイギリス・ロマン主義を除く）ほとんどが洋書である。洋書とは国外で出版された外国語の本であり、それに対応する和書とは、日本で出版された日本語の本であるといつて間違いはないだろうと思つたら、国外で出版された日本語の本や、日本で出版された外国語の本はどうなるのかという疑問が生じた。図書館に聞いてみたら、和書と洋書の分け方は悩みの種だということなので、これ以上の追求はやめておこう。

洋書の洋はもちろん海外から海を渡って持ち込まれたという意味で、開国以前の日本にはオランダ商人によって長崎に、福沢諭吉によってアメリカから船で持ち込まれた。それ以前の漢籍仏典も海をわたったに違いないのだが、これは洋書とは言わない。逆にヨーロッパからシベリア鉄道で送られてくる本は、朝鮮海峡の数時間の船旅で洋書と呼ばれるのである。ただしこの場合にも洋書と呼ばれるだけのことはあって、ヨーロッパからの新刊書を京城では東京の洋書店（丸善や国際書房）より1週間早く手にすることができたのである。

戦前の洋書輸入、特にヨーロッパからの学術書は、丸屋善八すなわち丸善と、後発の国際書房にほとんど限られていた。1869年1月1日創業の丸屋商社は、代表社員として丸屋善八という架空の人物を記載したところから丸善と呼ばれるようになったと、ウィキペディアは教えてくれる。実際の創業者は福沢門下の早矢仕有的で、このひとはたしか岐阜あたりの出身で、ハヤシライスに結び

付けられて記憶されている。丸善は経営の近代化をはかり日本で最初の近代的会社といわれるほどであったが、ぼくが接触した時代の感じでは、大学出の社員を育てなかった。このことは、第二次大戦後の洋書輸入激増期に、紀伊国屋などの新興洋書業者との対抗において決定的に不利であった。ただし、丸善の実質的な主力商品は洋書よりも洋品であったことを、付け加えておこう。

上記国際書房は、今では影も形もないが、戦間期の社会科学書輸入については無視できない洋書輸入業者であった。ぼくが創業者の服部さんと会ったのは、その甥の辻六兵衛（名古屋大学教授、若き日の中山伊知郎門下の三羽鳥の一人）がまだ生きているころだったから、昔のことである。

戦前の丸善洋書部は京橋の本社（だろう）の2階にあった。その1階と3階に何があったかは、全く記憶にない。丸善の洋品が学生にとって高嶺の花であったことの証拠だろう。東京商科大学の予科から本科に進学して、授業への出席から解放されたぼくが、ある日2階の洋書部への階段を上っていくと、踊り場の陳列のなかで目に付いたのがマクス・ウェーバーの科学論 *Wissenschaftslehre* であった。1939年初夏のころだから、9月に大戦が始まってシベリア・ルートが途絶するまえの、最後の輸入の一冊であったかもしれない。もちろん躊躇なく買ってしまったところに階段を上ってきた学生服の男がある。「岩崎さん、ウェーバーを見つけましたよ」といったまではよかったが、「それはぼくが注文した本じゃないか」といわれてしまった。相手が悪い。岩崎利一はぼくにとっては府立一中の先輩、山岳部の先輩で、そのときは学部3年、商法の教授が助手に取りたがっているのに、父親が頑として許さないのだという評判のひとであった。今でも銀座の松坂屋前に存続している岩崎眼鏡店の、彼は跡取りの一人息子だったのである。店員を呼んで確かめると、かれは注文品を店頭に並べた間違いを認めて謝ったので、ぼくはがっかりしたけれど、問題は簡単にかたづいた。

岩崎先輩は、結局、研究者にはならず、老舗を守って10年位前になくなった。銀座の老舗といえ（ぼくはその銀座時代を知らないのだが）細谷時計店というのがあった。岩崎眼鏡店とは老舗同士の付き合いがあったと語った細谷新治は、岩崎

利一と同年の府立一中と東京商大卒業で、現在は
一橋大学名誉教授。研究所の資料担当教授として
付き合いは長い。一橋大学に社会科学古典資料セ
ンターが設立される時、ぼくをセンター長によ
ぼうという提案が、「失礼ですよ」という細谷の
一声でつぶれたという話もある。銀座の老舗では、
もうひとつ靴の吉野家があるが、本とも研究とも
関係がないので、ふれないでおく。

戦前の銀座には大通を挟んで紀伊国屋と三味堂
という本屋があり、前者は新宿に本店があつて、
そこで本を買うのが楽しみであつたり、誇りであ
つたりしたが、洋書は京橋まで足を伸ばさなければ
ならなかった。ゼミのテキストであつた『国富論』
のモダンライブラリ版（その前のエヴリマン版も）、
『リヴァイアサン』のエヴリマン版、卒論に役立
ったテニエスのホップズ論はそうして手に入れた。
ルカーチの『歴史と階級意識』やレクラム文庫の
『共産党宣言』は、古本屋あさりの成果である。
カッシーラの『認識問題』三巻という大物もあ
つた（現在では四巻）。あんな難しいものをほと
んどに読んだんですかと、きいた人があつたが、内容
の見当はついていたので難しくはなかった。テニ
エスのほうが余程むずかしかった。

卒業後ほぼ1年で、ジャワ派遣の陸軍属として
神戸から乗船したとき、持っていった本がリヴァ
イアサンと茂吉の歌集のほかに、ヘミングウェイ
の『武器よさらば』（ペンギン文庫版）だったと
いう事は、かなりよく知られているが、明白な反
戦小説をどうして持ち込めたのかと聞く人もあ
つた。軍隊内部で兵士に対する厳しい思想統制、
読書統制があつたにも関わらず、軍属に対してそ
の種のものは全くなかった。特に応召将校の場合
は、将校行李に『資本論』を入れて輸送すること
ができた。そういう九大出の主計大尉のおかげで、
ぼくは捕虜時代に始めて『資本論』（高島訳）を
通読することができたのである。

高速輸送船安芸丸は門司から1週間でシンガポ
ールにつき、われわれはジャワへの渡船待ちの2週
間をここで過ごすことになる。その間に暇つぶし
に歩いた町の本屋で買ったのは、クールトンの
『(イギリス) 中世思想史研究』と英語のロシア語
文法書だった。はじめて海外で買った洋書である。
敗戦によって日本はソヴェートの支配下に入り、
自分はイギリス思想史の研究者になると、そのと

き店頭でひらめいたというのは少しできすぎだが、
全くの作り事ではなかった。船で持ってきた3冊
のうちのヘミングウェイは捕虜時代に、自動小銃
を突きつけるオーストラリア兵に奪われ、あとの
ふたつもそれぞれ紛失したのに、シンガポールで
買った2冊は残っていて、クールトンにはマカッ
サルで読了した証拠（1945. 12. 14）がある。

買った2冊をぼくの主観的な内面の問題とすれ
ば、外面的な衝撃はその本屋自体と買わなかった
本からきた。シンガポール・ハイ・ストリート47
番のエンサイン（海軍旗）書店は、1年前の激戦
地らしく店の奥に入って本を探す構造にはなっ
ていなかった。むしろ半ば露店であつたというべき
であろう。それだからぼくのような突然の旅行者
が、簡単に上記2冊を見つけることができたのだ。
激戦地あとにこういう本屋がいくつもあつて、こ
ういう本を売っているということが、ひとつのショッ
クだったのだが、その衝撃をそこに陳列されてい
たほかの本が増強する。

それは Living Thought Library 『生きている思
想叢書』と題して、近代民主主義の古典の抜粋に
現代民主派の序論をつけたものであつた。ハイン
リヒ・マンがニーチェ論、トーマス・マンがショー
ペンハウアー論、アンドレ・ジッドがモンテーニュ
論を書くのである。1942年には20冊全巻が出版さ
れたらしいが、シンガポールに入荷したのは1941
年末の開戦までの出版である。この叢書が5、6
冊、エンサイン書店の店頭に並べられていたし、
次に行った書店でも同様であつた。出版における
民主主義擁護運動に共感しながら、そのときそこ
で1冊も買わなかったのは、荷物が増えることへ
のためらいと、抜粋・編集への軽蔑があつた。前
者は容認できても、後者については勉強不足を認
めざるを得ない。それで、戦後イギリスの古本屋
で買い集めたのが7冊になったが、全体の三分の
一にすぎない。

ヒックスの『価値と資本』（1939）も、香港か
シンガポールのこのような店から、ぼくのような
日本人軍属か軍人によって持ち帰られて、戦中の
テキストであつたことで、戦後イギリス経済学界
の話題になった。

シンガポールからジャワへは、時速6ノット
（安芸丸は18ノット）という山下汽船の旭光丸で
四昼夜かかった。スラバヤに上陸して、夜行列車

でジャカルタにつき、宿舍を割り当てられる。勤務の場所として与えられた中央統計局の、蔵書の整備と占領 下にそれを守ろうとする職員の熱意（われわれに対する警戒心をふくむ）に驚かされる。蔵書のなかには『ルソウとカルヴァン』というような、思想史の本があったことを覚えている。書店の方はモーレンフリートの大通り（別名ノルドウェイク）にコルフ書店というのがあって、日本では見たこともない大きさであった。しかし思想史への関心からぼくが何度も訪れたのは、モーレンフリエットの水門近くに大きな倉庫をもった、オブスという古本屋と、市街地を離れたパッサル・スネン（月曜市場）の古本露店であった。ジャワで買った本のうち2冊（ロータッカーほか1冊）を高島先生に送ったことは覚えているが、そのほかは、『資本論』のアドラツキー版と英訳しか記憶がない。コルフ書店には日本では見られない（印刷技術の違いによる）ヨーロッパ判の画集があったのでかなり買ったが、もちろん持ち帰るわけにはいかず、フリーダ・ソウマンという混血の女性（食糧管理局の同僚）にあずけたのだが、間もなく始まる独立戦争の中では、画集どころか彼らの身柄さえ危うかっただろう。ふとあった 混血の男性が言った「あなた方はいいい、帰る国があるのだから」。

コルフ書店にはグレーゼルという30歳台の、知的な感じの女性店員がいて、彼女の身辺即ちわれわれ日本人との接触について男性店員の配慮が厳しかった。やがて彼女が漏らしたところでは、彼女はドイツ人で、夫は本国で抵抗運動に従事中ということだった。日本軍占領地で日本人にここまで言うことは、かなりの冒険だったはずである。もっとも日本軍は、ドイツ人のなかに反ヒトラーがいることを知ってか知らずか、彼女を盟邦ドイツ人として保護していたのである。

もちろんこの時期におけるぼくにとっての、書誌的最重大事件は、バタフィア法科大学の図書館で、ボルケナウの『封建的世界像から市民的世界像へ』（1934）の原書を発見したことであった。タイプライターのコピーで持ち帰り、全訳の出版にいたるストーリーは、何度か書いたが、ことのおこり（フランクフルト社会研究所）から全訳出版と受容まで、まとめて書いておく必要があるかもしれない。フランクフルト学派はほとんどこの

本によって、はじめて日本に知られるようになったといっているだろう。

1946年6月20日に復員船で紀伊田辺に入港して復員。10月から産業大学と呼ばれていた母校の特別研究生として、洋書とのつきあいをはじめた。そのころ新宿の紀伊国屋書店が洋書輸入を開始し、国立の大学構内には、明治大学法学部を出た美人の紀伊国屋店員（もと警視総監の娘といわれた）が常駐して、洋書の注文を取っていた。戦後初めてぼくが買った洋書はヴァーノン・ヴェナブルのマルクス研究であり、モーリス・ドップの『資本主義発達史の研究』であった。紀伊国屋書店の洋書輸入は、創業者田辺茂一の悲願であったが、問題は山積していた。何を輸入していいのかかわからないので、海外出版社のカタログの中から、輸入すべきものをぼくに選ばせなければならなかった。ぼくの選択が営業上の効果を上げたとは思わないが、紀伊国屋書店は、ぼくの本代の借金が月給の十年分を越えても、一度も催促をしなかった（踏み倒したわけではない）。紀伊国屋ビルの落成式によばれたとき、来客の顔ぶれを見て、ぼくは債務者代表であることを実感した。

1949年12月の発令で、ぼくは名古屋大学法経学部の助教授になり、翌年4月から経済学史、社会思想史、哲学の講義を始める。それぞれ旧制大学、新制大学、旧経専のカリキュラムである。講義を始めてすぐ気がついたのは、図書館がない、あっても使いものにならない、ということだった。この大学には戦後の改革まで文系学部がなく、旧経専（高商）では経営実務と統計のほかは省みられなかった。もちろん学徒出陣の影響もあっただろう。最終学年しか残っていない経専では、図書館利用者は稀であったから、ローマ字が読めない事務員でも間に合ったし、かれがパチンコに精出す余裕があったのである。

文化の沙漠といわれた100万（当時）地方都市で、対外依存といわれようが輸入学問といわれようが、洋書を買集めなければならなくなったわけだが、ちょうどその時紀伊国屋洋書部が地方展開を開始し、名古屋大学が重要目標となったのである。名古屋大学には敗戦前から医学部と理工学部があったし、丸善の名古屋支店があった。しかし理系学部とその研究者が求める海外研究情報は、単行本ではなくて雑誌であったから、名古屋丸善

は洋書についての知識と処理能力を持っていなかった。そこへぼくが東京での紀伊国屋との関係を持続したまま着任したのだから、業者間競争の勝負ははじめからわかっていた。波止場に積まれた18世紀のフランス百科全書を前にして、「先生この中にはヌードはないでしょうね」といいながら取り調べにかかろうとする税関吏にたいして、即座に「ないよ」という国立大学の教授が必要だったのである。ヨーク市のトマス・ゴドフリという古本屋の1951年のカタログでニューカム・キャップのスミス蔵書に出会ったのも、そういうある日のことだった（前述）。

こうしてぼくは紀伊国屋洋書部によって海外の古本屋への目を開かれ、1954―56年間にブリティッシュ・カウンスル・スカラールとして留学したときも、月32ポンド半の奨学金のなかから、グラーズゴウの古本屋でアダム・ファーガソンの『市民社会史』の初版を買って、マクフィー教授を驚かせた。そのときの値段は、10シリング即ち500円だったのだが、留学生にとっては重大な決意が必要な買い物であった。

ここから60年間の個人蔵書の形成が続いて今日にいたったわけだが、名古屋大学図書館に収められた7千冊の主要部分が、トマス・ホブズとその周辺、アダム・スミスとその周辺であることは、ぼくのこれまでの研究成果からいって当然であるにしても、それが蔵書の全てだと考えられてはこまる。ぼくは啓蒙の子であるとともに人民戦線の子でもあるのだから、それが蔵書の全体に滲んでいるはずなのである。日本資本主義論争には遅刻参加だった。

7千冊のそと側まで含めていえば、社会思想史だから当然、古代ギリシャからはじまるのだが、ぼく自身はプラトン、アリストテレスにはあまり関心がなかった。はじめりはアナクシマンドロス断片における一人称の発見（中川清論文）つまり個人の自己主張の承認であり、ヘシオドスとソフィストであり、ギリシャ本土よりもイオニア植民地の思想に関心があつた。そこにはアダム・スミスもいた。これが日本の哲学界における京都対東京の対立の、東京側にコミットすることを意味しようとはまったく気がついていなかった。個人の自己主張が、正義にもとづく社会秩序として確立されていく過程（『哲学講座』の三木清）は、アダ

ム・スミスだけでなく啓蒙思想を理解するのに役立った。もちろんそのときでも今でもギリシャ語は読めないから、とくにそのころは日本語文献だけに頼っていた。唯一の例外はハンス・ケルゼンの雑誌論文（アリストテレスの政治思想）であった。

キリストが最初の社会主義者であったことには異議がないとして、キリストおよびキリスト教にもあまり関心がなかったが、その後の問題は正統にたいする異端である。それがノミナリズム、理神論、合理主義、経験論、唯物論へと反体制思想としてうけつがれていくのが中世後半から啓蒙への思想史であり、ホブズもスミスもそのなかの人なのである。このあたりから（というより活版印刷から）集書の可能性がはじまる。キリスト教会の思想統制への反発は、異端の研究（復刻を含む二次資料による）への関心をぼくの中に生んだ。したがって、蔵書の中世の部分は主として異端関係である。教会を代表する正統派の思想には、上田辰之助という教授のトマス・アクイナス研究で触れることができた。これは古代ギリシャについて山内得立という併任教授（京都帝大と東京商大）がいたのに似ている。講義にはほとんど出なかったのに、2人ともぼく的答案には優をくれた（顔パス？）。

中世の異端といえば、おそらくどこでも農民反乱、農村共産主義と深くかかわっている。カンタベリー物語とならんでイギリス中世文学の巨峰とされるウィリアム・ラングランドの「農夫ピアズの夢」は、オクスフォード版のセットをかなり早く揃えたつもりだが、とくに研究したわけではない。1382年の農民一揆については、バーミンガムの中世史家、ロドニ・ヒルトンに教えてもらった。かれにはヘレフォードの古い電話帳からアダム・スミスの末裔を探し出してもらったりもしたが、いずれも蔵書には関係がない。

異端のもうひとつの側面であるノミナリズムと理神論のほうが、多少は蔵書に反映されているだろうか。これについては歴史的順序にしたがって後述とする。存在するのは個であって、全体は空虚である、ということで、ぼくはアダム・スミスの言語起源論にその例を見る。権力側としてはジョン・フォーテスキューやエドマンド・ダドリがあるが、特にあげるまでもあるまい。それよりも、

入手困難とはいえないにしても、パドヴァのマルシリウス（Marsilius of Padua, d. 1342?）の『平和の擁護者』が英語・フランス語・ドイツ語・トスカナ語で揃っていることをあげておこう。

近代思想のはじまりとされるルネサンスと宗教改革については、宗教改革は必然的に正統と異端、個体と全体の問題を抱えているので、ルネサンスの自由主義よりも、研究対象としてははかにおもしろい。したがって宗教改革についての二次文献は50を超えているが、とくに珍しいものはない。しかし宗教改革直後からホップズとその前後の時代のものはかなり集中的に集めた。それとほぼ同時代のイギリス・ブルジョワ革命については、クリストファー・ヒルによる新しい研究が始まり、多くの原点がリプリントされた。ハーリアン・ミセラニーとトマス・コレクションについては、ハーリアンは二つのセット（ジョンスン編は不完全）を買い、トマスは科研費で購入したフィルムを大学に残した。その後の技術の発達によって、たいいていの原資料はコンピューターで読めるようになったが、読みにくいということのほか、資料の物的存在としての意味（たとえば出版事情）がわからなくなっている。

この時代の原資料のひとつとして、ヘンリー・パーカーのものとされる6ページの国王あて『請願』（1642）がある。

ハーリアン・ミセラニーというのは二代オクスフォード伯エドワード・ハーリーが集めたパンフレット類を、ウィリアム・オールディス（Oldys, William, 1696-1761）とサミュエル・ジョンスンがそれぞれ編集したもので、オールディス編のほうがいいとされている。トマス・コレクションはロンドンの本屋でミルトンやプリンの友人であったジョージ・トマス（?–1666）が集めたパンフレット類で、1762年にブリティッシュ・ミュージアムに寄贈された。今では誰でもどこからでも読めるようになったが、その頃は原資料のコピーを手に入れることが最初の問題であった。

ホップズから広がる啓蒙思想については、スコットランド啓蒙を意識しながらイングランド、フランス、オランダ、ドイツから適当に集めたが、研究としては『社会思想史概論』でスピノザに触れられなかったという悔いが残っている。啓蒙思想全体を代表するのはヴォルテール（筆名）であり、

その代表的な発言は『イギリス便り』または『哲学書簡』の、「イギリス人はそれぞれすきな道を通して天国に行く」という宗教的アナキズムである。かれにはもうひとつ、「君の言うことには反対だが君がそれを言う自由は命がけで守る」というかつこいい言葉が伝えられているが、これは証拠がない。いまアナキズムといったのは、異端ではあるが許すという寛容論と区別するためである。寛容論で有名なロックは、弟子の理神論を許さなかったと、ぼくもどこかで書いた覚えがあるが、最近の研究によればかれは護教の鬼であったという。

宗教的アナキズムが言論の自由に拡大されるには、バンジャマン・コンスタンからジョン・ステュアート・ミルへと啓蒙の枠を超えなければならない。だがそのまえに、トマス・ペインを弁護して皇太子づき法律家を罷免された、大法官トマス・アースキンをあげておきたい。有名人なのだが、アダム・スミスの弟子たちを探していて、サー・ジェイムズ・ステュアートの甥に当たるアースキン三兄弟にめぐりあったのだった。長兄バハン伯は雑誌 *Bee* の編集者で、スミスの印象記を書いている。次兄も民主派法律家であった。上の2人はグラズゴウ大学でスミスに師事したのだが、貧乏貴族の家計は末弟に大学教育をうけさせる余裕がなかった。アースキンの弁論集5巻のほかに匿名著『アーマタ』（第二部ともに第二版）などを残したのは、読むつもりだからである。

諸宗教の平等性については、レッシングの『賢人ナータン』にふれたのが端緒だともうが、林達夫の紹介で問題が明確になったのは中学時代の読書か、ずいぶん前の記憶である。理論的には平等といえても、それぞれが教会組織をもつと抗争はさけられなくなる。アイアランドでは、イスラムもユダヤもないのに、キリスト教の中で国教と長老派とカソリックが、鼎立して争っていた。三派平等とカソリック農民の救済をめざすユナイテッド・アイリッシュメンの反乱は、革命フランスの軍事援助を期待して行われた（1798）。これもまたアダム・スミスの弟子を探しているうちにめぐり合った事件である。アイアランドは、すでにロバート・モールズワース、ジョナサン・スウィフト、フランシス・ハチスンによって、ぼくの思想史にはいつていたが、ユナイテッド・アイリッシュメンは

ハチスンの孫弟子の世代である。関係資料が百年記念に出版されたものは集めたし、北アイアランド公文書館でコピーもとったが、原典はウィリアム・スティール・ディクソンの自伝ぐらいしかない。彼はスミスの最後の講義をきいたらしく、スミスの高弟ジョン・ミラーと親しかった。

アイアランドでもうひとり、気になっているのが、デュアムの大主教エドワード・シング (Sing, Edward)。スウィフトの同時代人で、カソリック農民の窮状に同情して、十分の一税を減免しながら寛容令には反対した。紳士の宗教とかカソリック・キリスト教とかいう題名も気になるが、はじまりはダブリンのトリニティ・カレッジで、かれがコメニウスを翻訳したことを、知ったときである。ということだが、これからどういうことになるのだろうか。わからないからおもしろい？

理性崇拜はフランス革命の特徴だといわれることがある。話はそれほど簡単ではないのだが、理性が神を飲み込んでいく理神論とノミナリズムの発展は、啓蒙思想史のおもしろいドラマである。それは各国それぞれに見られるうちに、とくにイギリスでは アンソニー・コリンズ (Collins, Anthony, 1676-1730)、ピーター・アネット (Annet, Peter, 1693-1769)、コニアズ・ミッドルトン (Middleton, Conyers, 1683-1750)、ジョン・トランド (Toland, John, 1670-1722) などの活動が活発だったので、できるだけ集めることにした。ジョン・プライスとジョセフ・プリーストリを忘れたわけではなく、この種の本を買い続けたオクスフォードの Waterfield という本屋とは、最近の閉店まで数十年のつきあいで、最後にちかくぼくがウィリアム・ゴドウィンを買ったときは、この本の good home を見つけたことを喜ぶという本屋のメッセージが入っていた。経営者は何代かわったようだが、オクスフォードを出た bibliophile たちなのである。彼ら自身もラディカルな理神論者だったのだろうか。家族でオクスフォード近郊の優雅な自宅を訪問したことのあるデヴィッド・ロウは、ロンドンに店を出していた。理神論の類似の名称として国教に同意しない Dissenters というのがある。

1963年に創立された国際十八世紀学会が、四年ごとに国際会議を開き、来年 (2011) はそれがオーストリアのグラーツで、開催されることになっ

ている。研究書の出版も総論であれ各論であれ各国で盛んで、数十冊集めてみても九牛の一毛ということだろう。それに、名古屋大学の受け入れ計画では逐刊的出版物は原則として含まれていなかったようであるが、単行本として処理できるものはいくつかはある。

ジョナサン・イズレールというプリンストン大学の高等研究所歴史学部の教授がいて、オクスフォードから『ラディカルな啓蒙』と『争われる啓蒙』という、2冊で1,700ページの本を出している。この人にはもう1冊、『オランダ共和国』というのがあるはずだから、あわせると2,500ページになるだろう。もちろん著書には、書き方も読み方も精粗いろいろあるから、見かけほどのことはないかもしれないが、研究者の宿命としてこの種の本に囲まれて暮らさなければならないのである。昨年1月に到着したスイスからの小包はピエール・コンロンの『啓蒙の諸世紀・年代記的書誌』の第32巻であった。ここまで来ると、もういい加減におわりにしてくれよ、といいたくなる。

啓蒙の後に挫折の思想としてロマン主義があらわれ、その中から初期社会主義が出て成長する。それとほぼ平行して、支配するブルジョワ合理主義あるいは功利主義が確立される。ロマン主義については、いくらか書いたもの、書きかけているものがあり (『象』30、36、41、54号に「ロマン主義について」「ドイツのロマン主義」「イギリスのロマン主義 (1)」「なぜロマン主義なのか」) できればまとめたいと思っているので、バイロンの議会演説やシェリの政治論文などを含めたイギリス・ロマン主義の全部と、大陸の若干を留保した。そのために大学に入った7千冊がロマン主義を分断したことになるかもしれない。紀伊国屋出版部からロマン主義論を出す約束をしたのは、村上一郎がいるころだった。

1848年と1871/72年は政治史だけでなく思想史でも転換期であった。簡単に言えば、具体的な個人が確立されるのである。それはマルクスよりもアナキストたち、彼らに同調した文学者・芸術家たちによって代表される。マルクスの貢献は、個人に目をくらまされずに集団としての階級をはっきり捉えたことと、史的唯物論の基礎をすえたことである。思想を具体的な社会的存在として捕える方法として史的唯物論が洗練されるにはその後

約100年が必要だった。したがって、洗練の過程も現代的成果も、関心のまとである。ソヴェートが崩壊し各国共産党も解体が進む中で、それぞれの国で左翼の組織と思想の歴史研究が行われている。その研究書がイギリスで10冊を超えているから、その他のいわゆる先進諸国でも同様だろう。戦後間もないころ活躍したヒューレット・ジョンソンというカンタベリの牧師が、赤い司教とよばれていたし、アナ・パウケルというブルガリア共産政権の女性外相がいた。それぞれについて研究があり、日本でも最近、反スターリンの人民戦線派、ヴィリ・ミュンツェンベルクの研究（星乃治彦『赤いゲベルス』岩波書店）が出たが軽い。主題そのものが、悲劇ではあっても軽いのか。マルクス主義思想史というの、カップ・ブックス（光文社）の『マルクス主義入門』（1966）以来多くのテーマであり続けていて（水田洋編『マルクス主義思想史』日本評論社、1970）、オランダとオーストリアのマルクス主義への関心はその一部分である。オランダ語の実力はまったく落ちたが、戦時三年近いジャワ暮らしはまったく無駄ではなかった。

これで終わりにするつもりだったのだが、ジャワとオランダ語が出てきたので少し追加する。直接に関係があるのはオランダ人ムルタトゥーリ（エドゥアルト・ダウエス・デッケル）の殖民政策批判小説『マックス・ハーフェラール』である。2003年に佐藤弘幸氏によって完訳が出たこのオランダ文学の傑作について、詳しくは訳者解説に譲るとして、1942年にぼくは2月に出た最初の邦訳を、ジャワにむかう前に読んでいた。戦後オランダで買った本の中に何かあったと思うが、現在オランダ関係はコピーも含めてすでに名古屋大学図書館にある。その中にひとつ、オランダ人植民地官僚の自伝的著書があるはずで、それは報告書にマクス・ヴェーバーの理論を援用したために、マルクス主義者とされて左遷されたという人である。

Koch, D.M., *Verantwoording*. Bandung, 1956, p.111ff. (cf. *Mede-deelingen omtrent enkele onderwerpen van algemeen belang stroomingen onder de inlandsche bevolking*.)

インドネシア（インスリンデInsulinde）やフィリピンが植民群島であったのに対して、アフリカ

は植民大陸であった。北部の地中海沿岸にはアルジェリアのように近・現代思想史に場所をもっている国があるが（中世のアラビア文化は別として）、サハラ以南（サブ・サハラという）には、虐殺されたルムンバの先輩、後輩、裏切り者たちの政権ができたりつぶれたりしている。ぼくは南部アフリカ（南アフリカ共和国を含む）十八世紀学会の終身会員であり、その大会に二回出席したが、そこでの議論（たとえばバイロンの議会演説）とジンバブエやザンビアの恐るべき貧困とが、どうもチグハグなのである。そこに思想が成り立ち得るかと思ひながら、手がかりになりそうな本を集めている。ヴィクトリア滝への道でリヴィングストン像の前を通ったとき、「帝国主義のパイオニアだよ」と若いガイドに言ったら、本当にうれしそうに笑った。観光客はそういうことを言わないらしい。

植民大陸といえどもひとつ、中南米がある。ここには最近の大地震がなかったら忘れられたままだったかもしれない、フランス革命のときのハイチ共和国があり、ボリビア独立の英雄シモン・ボリーバルがあって、いずれもヨーロッパ啓蒙と無関係ではない。ブラジルへのポルトガルの植民政策には、アダム・スミスも言及している。コールリジとサウジーは南アメリカに共産村をつくらうとしたし、そのまえに、ウルグアイにイエズス会士の共産村がある。1865年にジャマイカで黒人の反乱があり、総督によるその処理にJ.S.ミルが反対した。これについては山下重一『J.S.ミルとジャマイカ事件』がある。ぼくは国家公務員であったとき、この事件の調査を理由にしてジャマイカとバミューダにいった。関心はバークリのバミューダ計画の方にあるのだが、資料収集の点ではボリーバルが面白そうだ。ただし主としてスペイン語である。

スペイン本国は、イエズス会の創設者イグナティウス・デ・ロヨラを生んだ異端糾問の本拠であるが、ドン・キホーテの国でありゴヤの国でもあった。それよりもぼくにとっては、人民戦線と内戦（1936-39）の国である。学生時代に乏しい情報を頼りに関心をもち続けていたことは、何度か書いたから繰り返さない。国際旅団へのイギリス人参加者を中心にした川成洋の研究もある。

ぼくの蔵書の中のスペイン内戦は、主としてイ

ギリス人の回想記のほかにドイツとイタリアの介入を示す報告書 (*Akten zur deutschen auswärtigen Politik 1918-1945 aus dem Archiv des deutschen auswärtigen Amtes. Baden-Baden, Imprimerie Nationale, 1951.* 戦後に連合国の委員会がドイツ外務省の文書を編集公刊したものと *Spanish White Book. The Italian Invasion of Spain. Official documents & papers seized from Italian units in action at Guadalajara, Washington, Spanish Embassy, 1937* スペイン共和国政府が国内に潜入したイタリア部隊から押収したもの) と、ソヴェートの介入を示すインプレコール4年分である。インプレコールというのは *International Press Correspondence* で、簡単にいえば国際マスコミ情報という、コミンテルンの公表情報である。したがって内容は、スペインだけでなく全世界の事情への、コミンテルンの対応を示している。1932年には日本に関する32テーゼを掲載していたのだから、早く気がつけば入手できたはずである。

この4年分を買ったのは、グレイ夫妻のハーマスミス書店が、地下鉄のハーマスミス駅前の、階段まで本を積み上げていた店から、駅前開発の補償金をもらって少し離れた倉庫に移り、しばらく営業していたあいだで、そのまえにロイ・パスカルのスコット歴史学派論を掲載したモダン・クォーターリーをはじめとして、イギリス左翼の出版物をずいぶん買った。この本屋の存在を教えてくれたのは、スイスのピンクスのばあいと同じようにゾーン・レーテル (イギリス亡命者、のちにブレーメン大学教授) であったか、グラズゴウのミークであったか、いまとなっては確かめようもない。

スペイン内戦については、最後にひとつ追加したいものがある。現在の蔵書の混乱状態のためにはっきり書けないのだが、それは国際旅団のイギリスからの募集の裏話である。著者はシャーロット・ホールデンで、生物学者、題名は『真実は明らかになるだろう』、右翼図書クラブの出版。左翼の生物学者ジョン・ホールデンの妻であった。

コミンテルンの第2 (1920)、3 (1921) 大会のプロトコールと、6 (1928)、7 (1935) 大会の活動報告がある。はじめのふたつはドイツ語だから、ピンクスで買ったのだろう。ただしハーマスミスの可能性もあるし、戦後しばらく活発に出版と古書籍で活動したデン・ハーフ (ハーグ) の

マルティヌス・ネイホフだったかもしれない。第7回は英語で、議事録要約のほかにディミトロフの報告 (反ファシズム統一戦線論) などがあるが、後者はあとから集めたパンフレットをまとめて製本したものである。コミンテルン資料には村田陽一編訳『コミンテルン資料集』があり、そのなかの32テーゼについては何度か言及した。ついでにソヴェート政府の三つの裁判の記録をあげておこう。4冊全部英語で、1933年のイギリス人技術者にたいするサボタージュ裁判が2冊、1937年のラデック、ピャタコフ裁判と1938年のブハーリン、ルイコフ裁判がそれぞれ1冊である。800ページの裁判記録の最後で、ブハーリンが罪を認めつつ最後の抵抗をしているのは痛々しい。ボルシェビキ最高のインテリといわれていた人物である。

戦後の共産党史の中では東ドイツとチェコとハンガリーの異端糾問事件にわずかながら触れることになった。蔵書には直接に関係がないから簡単にしておくが、ドイツではクツィンスキーとハーリヒ、チェコではマツェック、ハンガリーではルカーチに関する問題である。ハンガリー事件をきっかけにしてイギリス共産党のなかで起こった、新左翼については、ちょうど発火点にいたので *Universities & Left Review* と *New Reasoner* が簡単に手に入った。そのまえのガリ版刷り *The Reasoner* (J.サヴィルとE.P.トムスン編、1956) は2号と3号。さらに戦前の *Left Review* (Jan.1936-May 1938) もある。これが1938年に *The Modern Quarterly* に継承され、戦後に *The Marxist Quarterly* になった、ということだろう。 *The New Left Review* と *Past and Present* は、創刊号から全部揃っているはずである。ただし熱心な読者ではなかった。

以上で、もちろん精粗の差はあっても、北極・南極・イスラム圏を除いて世界を一周したかと思ったのだが、スカンディナヴィアがあった。近経側からの社会主義者義者ヴィクセルについて書いたのは、伊東光晴に教えられたからだが、デンマークのブランデスへの関心は古い。戦前に春秋社の世界大思想全集というインテリ失業救済出版みたいな企画があって、そのなかにブランデスの『十九世紀ヨーロッパ文芸思潮』の全訳がはいっていた。そのドイツとフランスのロマン主義を訳した吹田順助と内藤濯は、東京商大の教授であって必

然的にぼくの恩師ということになる。吹田順助は予科の文芸部顧問であり、ぼくに「末次（海軍大将）が内相になったんだから気をつけてくれよ」といってから、「きみにファッショになれというんじゃないが」とつけくわえた。内藤濯は学園新体制なるものができたときの教官側文化部長で、学生理事のぼくに対して「水田君しっかりやりましょう」と手をさしだした（『ある精神の軌跡』）。そういう関係から2人が翻訳したブランデスの著書に、多少は親近感が増したといえるかもしれないし、そういう教師たちをもったことは幸福だったとは思いますが、もちろん実質はブランデスが呼びかけたスカンディナヴィア文学の社会的目覚めであり、主著にはそれがヨーロッパ19世紀文学史として表現されていることになる。ぼくの蔵書の特徴は手紙全4巻が（第4巻は分冊のままで）が含まれていることである。これを手に入れたきっかけは、クヌート・スヴェンセンという相手の名前さえ忘れそうな古い話だが、デンマーク共産党員の若い研究者から、経済学通史の国際書誌を作ることについて、協力を頼まれたことであつた。日本には経済学史の独立の学会があるということ、どこかで聞きつけたのだろう。しばらく付き合っていたが、そのうちに彼がアフリカ問題に関心を持ち、現地に行くようになって、交際は途絶えた。

どうしてそれだけ集めたのかという質問には、資金、量、質、範囲が問われているのだろうが、ぼくの場合は範囲の広さを特徴としてあげたい。自分の研究の広がりやを予定して白地図をつくるのだが、それはスラブやイスラムをのぞいて思想のほとんど全領域を含み、誰かほかの人（たとえば学生）が踏み込んでもいいのである。その中に、さし当たっての研究、次の研究、やがての研究、いつかの研究、ずっと先の研究についての書誌的なアイディアを描いていく。誰かの研究というのもいくつかあっていい。こういうことだから、海外の古本屋にテーマを指定して集めるのは、自分の視野を他人の視野によって限定してしまうという敗北主義的愚行である。近代初期の出版物は、もちろんこれから増産されるわけには行かないから、自然的磨耗のほか、市場から消えていくが、私的に購入されたものは市場に戻ってくる可能性が高い。それらは古本屋の店頭、倉庫、目録をへ

て読者に帰ってくる。ぼくの買い方としては目録によるものが一番多いだろう。古本屋の目録はおもしろい読み物で、ぼくは教授会で愛読した。チャーリヒのピンクス書店の屋根裏で、クリスティアン・ガルヴェを10冊近く買ったのが、倉庫買いのただひとつの例である。

どのくらい金をかけたかという質問は困る。55年以來の貨幣価値の変動の例としてはポンドが1,000円から100円になったことをあげておこう。そういう中で、1冊10万円以上の本はホブズ初版（？）をのぞいてひとつもなく、大学教授の家計をとくに圧迫することなく古本を買い続けてきたのである。ホブズボームが日本にきたとき、研究室のぼくの蔵書を見て、「きみはロヤルティーを全部これに投じたな」といった。かれによればぼくは、「アダム・スミスの翻訳がよく売れるので、毎年ヨーロッパにこられるlucky man」なのだった。スミスだけではないが、印税・原稿料が図書費・旅費をカバーしてきたことは確かで、それはなお継続している。

この蔵書を買いたいといってきたのは、台湾の精華大学の頼建誠であつた。その頃の台湾は外貨が豊富で、頼はぼくの『スミス蔵書目録』の王立経済学会版（1968）を見て思いついたのだろう。そのときは、スミス以外に広がっているぼくの蔵書が、精華大学のアメリカ帰りの若い経済学者たちに受け入れられるかという疑問を持った。頼自身は例外的にベルギーで学位をとっていて、それだから蔵書を買うという提案になったのだろう。ぼくが迷っているときに、珠枝が「あたしここではちょっとナショナリスト」といって、国外流出に反対したので、エピソードは消えた。

誰から買ったのか。あるとき、つきあいのある海外の古本屋を数えたら、30ちかくになったという記憶がある。いまでは、カタログを送ってくれるのは、スコットランドに3軒、イングランドに3軒、オランダに1軒、パリに2軒、ベルリンに2軒、スイスに1軒、合計12軒である。最初に直接に関わつたのはオランダのハーグ（スフラーヘンハーフ）のネイホフ書店だった。紀伊国屋が読み方がわからないといって持ってきたNijhoffのオランダ流の読み方を教えたあたりから、交渉が始まった。この書店が計画した国際思想史叢書が、どのくらいの規模で実現したかは知らないが、最

近パリのヴランから 手に入れたO.R. Blochの『ガセンディの哲学』は1971年の出版だった。ついでにこの本がボルケナウを使っていたことをいっておこう。ネイホフは、大陸啓蒙の古版本を入手するのに便利だったのだが、急速に書物の領域から撤退してしまった。ネイホフより古いらしいレイデンのブリルは、古本はロンドンの支店でしか扱わなかったようだが、出版社としては本業らしい中世思想史のほかに、バクーニン全集を出し、最近では **Historical Materialism** という季刊誌を出版している。オランダにはこのほかに1、2軒、個人経営の古本屋があって、オランダの共産主義者たちの資料を40冊供給してくれたが、経営者の死とともに連絡が絶え、忘れられた。そういうケースはほかにもいくつかあった。一番早い直接交渉は、イギリス留学時代にいったハーディング書店で、これはブリティッシュ・ミュージアムの隣みtainなところにあったから、ミュージアムの読書室(Reading Room、British Libraryの前身)にきた留学生が見逃すはずはなく、戦前から日本人の顧客を持っていた。われわれ全体が古書収集を開始したときだったから、ここでは依頼されたものを含めていろいろ買ったし、とくにありがたかったのは、地方で買ったものについて保証と中継をひきうけてくれたことであつた。エディンバラの小さな店の地下でみつけたブリタニカ初版は、そのおかげで入手できたのである。ところが、全てを処理してくれた店主のウィーラーは、「こんなものをどうして買うんですか、うちに持ち込まれたら捨ててしまいますが」といって、やがての店じまいを予告したのだった。

まえにふれたハーマスミス書店は1948年からの営業を2000年で終了し、在庫本はゴールウェイ(アイアランド)の同業者にゆずった。経営者のロンルド・グレイは初等教育と戦争体験しかないといっていたアメリカ・ユダヤ人であつた。

バーナード・クオリッチ書店は、ドイツうまれの創業者によって1847年にロンドンで創業された名門である。コレクターむきのカタログには、手が届かない高価本ばかり並んでいるが、時には最近買ったフェミニズムの古典、アイアランドのウィリアム・トンプソンの主著のような宝物が出ている。カタログを送り続けてくれるのはおそらく、ディレクターのプール・ウィルスンがピエロ・ス

ラッファのもとで同門(?) だったということによるのだろう。

コーガン・デュヴァル、コーリン・ハミルトン書店から、スコットランド啓蒙関係のカタログをうけとったのは1970年代だったと思うが、家族ぐるみのつきあいは続いていて、ぼくは一昨年までほとんど毎年、タメル湖畔の豪邸にとまって美食を楽しんできた。同業者のひとりであつたフリッゼルは彼らについて、「商売を始めたとき、彼らはわれわれと同じようには貧しかったのだが、彼らは古書を探し出す嗅覚をもっていたのだ」と語った。とつぜんカタログが来たのも、そういう嗅覚によつたのかもしれない。

編集委員会注：

この原稿は、2010年10月30日(土)に開催された名古屋大学附属図書館2010年秋季特別展「水田文庫新収蔵記念 アダム・スミスと啓蒙思想の系譜」講演会の講演内容をもとに加筆修正したものです。